

---

# ゼロの使い魔 ～大樹の魔法使い～

神榛 紡

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

ゼロの使い魔 ～大樹の魔法使い～

### 【Nコード】

N4408X

### 【作者名】

神榛 紡

### 【あらすじ】

ゼロの使い魔に転生する。それは未曾有の大災害との戦いを義務付けられ、戦争に強制参加させられ、お花畑なお姫様に振り回され、美少女を物にできる可能性のあるマイナス多き転生である。これはとある少年に起こった、多大な不幸とそこからの脱却の物語である。

つい投稿しちゃった物です。滅多に更新しません。

## 説明回なプロローグ

はじめまして、ヴァルトリーベ・レルヒエ・シュペルリング・ド・ウングリュックです。ごさいです。

初っ端からふざけてみたけれども、俺は前世の記憶を持った転生者であり、現在生きている場所はハルケギニアのトリステインのウングリュック伯爵領の伯爵家三男だったりする。

そう。あのゼロ魔だ。設定曖昧。ご都合主義万歳。国際問題何それおいしいの？ なゼロ魔だ。

何度あの半二ト生活に戻してくれと思ったことか。

伯爵ならいいじゃないかと思うかもしれないが、衛生問題の重要さを三歳での身で説いたり、石でも舗装する事でいかに行軍や流通が良くなるかを説いたり、罪人を労働力として地下深くの風石を掘らせたり、民の大切さを説いたりしてきたが、不幸の名を冠する領地は伊達では無かった。

ボットントイレを作らせれば大雨で中身が溢れる。週一で中身を燃やしていたのを一日一回汲み上げて燃やす事に対応。するとピタリと雨が止んだ。なにそれこわい。

石で舗装すればメイジが固定化を怠りあちこちでひび割れ陥没が発生。速攻で人をやり修復、信用できるメイジに固定化を頼んでどうにかした。金が……。

罪人を労働力に領地の隅で風石を掘らせれば突然坑道が陥没。穴の深さに対して木材などの補強では足りていなかった事が判明。まさか罪人のためにメイジを派遣する訳にも行かず、別の労働へ罪人を使う事に。風石問題があ。

民の大切さを父に説いて、領地での理不尽な暴力を罰するようにすると、神官が難癖を付けて来た。正しい事して何で文句言われるんだボケと蹴り返せればどんなに良かったか。泣く泣く撤回するはめに。あのデブ神官いつか殺す。

e t c . e t c .

一ミクロンでも隙があれば不幸が襲ってくるこの始末。父の手腕があるからこそ領地としての体裁を保ってはいるが、調べてみると神官の数が他の数倍だったり、どうも年間行方不明者が多数居たりと本気でヤバイのが我が領地だ。

領主から従っているメイジ集団まで割といい人ばかりなのに一体何故と言うしかない。

これで領主まで他の連中みたいに馬鹿だったら即効で廃領だが、そうじゃないのが唯一の救いと言いたいのだが、どうにも父のお人好しな性格に付け込まれて押し付けられたのが現実らしい。

他の奴だったら無法地帯になっていたからこれが最善だったんだと納得するしかない。

だが、そんなこんな不幸も乗り越え、俺もようやく五歳になったのだ。これが意味する事は非常に大きい。待ち望んでいた奇跡と言ってもいい。よく生き残った俺。育ててくれてありがとう父さん、母さん！

そんな俺は現在杖の契約中だったりする。

原作ではどうか知らないが、この世界だと杖には大抵銀が使われている。木の芯に埋め込んだり、剣に装飾として付属させたりと多々あるが、職人が一定のルーンを刻んだ物と契約するのが一般的だ。熟練の職人であればあるほど、小さくともきちん効力の発揮する物が作れるらしい。

その契約方法だが、実際に魔方陣の中でぶつぶつ言ったり、じつと意識していればいいという物ではない。

端的に言つと、己の魔力を注ぎ込み、杖となる物体を染め上げるのだ。

その難易度で言えば、銀を使ったルーン有りで一として、銀のルーン無しなら百、ルーン有りの銀以外の金属ならおおよそ二十、

ルーン無しの銀以外の金属なら百五十〜二百、木などの植物にルーン有りだと二百前後、無しで三百五十〜四百強、質が普通以上の宝石だと有りです〜五十、無しで百〜百五十、石だと有りです三百、無しで五百といった感じだ。

色々と例を挙げたが、普通にメイジだと超努力して頑張つて、奇跡が起こってほしい二百くらい。タバサとかの天才だと死ぬ気で頑張れば四百くらいと考えてもらえばいい。ついでに言うとかいと難易度も上がるし時間も掛かる。小さければ銀を使って普通のメイジで一週間が目安だ。

あの年でデカイ木の杖を使っていたタバサは本当に規格外だったんだな、と思いき知らされる次第。あと、独力で契約したティファニアも天才だ。キュルケも天才でルイズは虚無と、本当に原作中心人物の才能は嫌になる。初めてギーシュで癒される事を知ったくらいだ。

と言いつつ、俺の場合は財政状況もあってちょっと村の細工師に頼んで作ってもらった櫛の木製の杖と契約しよう頑張っているのだが。今日でもうひと月になるので、今日の夕方にも魔法を試して使えなければ、普通に杖をおねだりしようと思っている。

「父様。杖の契約が出来たか魔法を使って確かめたいのですが、見ていただけませんか？」

「何を言っているんだ？ 半月くらいで契約できていただろう。てっきり自分で魔法の練習に入っている物だとばかり思っていたのだが」

「……………え？」

半月無駄骨？

## 基礎的な第一話

さあ、やって来ましたよ！

何かと問われれば家庭教師です。

クララ・シュバリエ・ド・グラージェさんです。二つ名は『鉄薔薇』で、父上に仕える家臣の中でも最強の呼び声高い優秀なメイジらしいです。

クララさんは、灰色の髪をウルフカットにしており、凛々しい顔付きも相まってかなりの迫力がありました。スタイルも良く引き締まった体をしているのですが、結婚していないのは我が領地の呪いか、それとも彼女の雰囲気近寄り難いのか。

「ヴァルトリーベ・レルヒエ・シュペルリング・ド・ウングリュックです。今日からよろしくおねがいします」

「よろしい。ゴールド様から、ヴァルトリーベ様はとても聡明で理解が早く優秀だと窺いました。私としても、五歳でルーンも刻んでいないただの木の棒を杖とする才能に期待しています。そのような事ができるのは最低でもスクエアになれる素質がありますからね」

「はい。がんばります。あと、ヴァルでいいです。呼びにくいですよね」

「分かりました。では、ヴァル様とお呼びしましょう」

後になって聞いたのだが、杖を契約するのは相性があるらしい。

俺が呼んだのは火がメインのメイジが書いた書物であり、杖の契約は千差万別であり、共通しているのはルーンを刻まないと契約の難度が一気に上がるという事だけらしい。

まあ、それでも有機物との契約は難しい部類らしく、普通は無機物を木などで覆って見栄えを良くするらしい。契約するのは芯に使った金属などで、外装はオマケだそうだ。

俺のやった事は常識的に考えないような行為というのが泣けた。

「コホン。では、まずは基本的な魔法からやっていきましょうか。まずはこれです【念力】」

「石が浮きましたね」

「これは基本、自身で持てるような物を遠くから動かす魔法です。普通、日常で使う事はあまりありませんが、横着な人は念力で物を取ったりします。また、大きな物や重い物になると、動かせなかったり動いてもゆっくりになったりします。石でもせいぜい人が走る程度の速度しかできません」

言つて、石をグルグルクルクル動かして見せてくれるが、確かに日常生活でも戦闘でもあまり使う機会は無さそうだ。せいぜい手の届かない場所の物を取ったり、奇襲する時に注意を別所へ向けたりする程度だろう。

クララさんからやってみるように言われ、念力のルーンを唱える。イメージは念動力で良く言われる第三の手。三つ目の手を伸ばして掴み取るイメージだ。

「我が意の元に動け、【念力】」

言葉と共に魔力が吸われる感覚があつて、同時に、ふわっ、と石が浮いた……のだが、それを見て集中が途切れてしまい、数センチ浮いただけでポトリと落ちてしまった。

「初めてで少しでも浮くとは素晴らしい才能です。これなら今日中に念力は覚えられそうですね」

「才能があるというなら嬉しいですね。早く父上や母上、兄上達みたいになれるように頑張ります」

「焦らずとも大丈夫ですよ。ヴァル様はまだ子供で、魔法も習い

始めたばかりです。きちんと努力していけば、すぐにでも一人前の魔法使いになれるですよ」

クララさんの言葉に頷き、もう一度浮遊を使う。すると、今度はきちんと浮かせられた。クララさんのように、石を同じ高さに留めておくのはまだ出来ないが、十分だろう。

それを過剰に褒めるクララさんの言葉を受け流して、次の魔法を教えて欲しいと願った結果、基本的なロック、アンロック、ライト、ブレイド等、基本的なコモンマジックを教わった。

「ミス・クララ。教えてもらってこんな事を言うのは変かもしれませんが、系統魔法はやらないのですか？ 教わるのはコモンマジックばかりで、系統魔法は一個もやっていませんが」

「ヴァル様。ヴァル様は確かに聡明で秀逸した才を持っておられます。おそらく、いきなり系統魔法に飛んだところで、問題なく使えてしまうでしょう。ですが、何事も基礎が重要だという事を忘れてはいけません。基礎を飛ばして応用に行ってしまうと、安定もしませんし、魔法が思った通りに使えず危険です。どんな事でもそうですが、基礎の強さこそが、その人の強さに直結する物差しです」

「そうですね。変な質問をしてしまって申し訳ありませんでした」  
「いえ、疑問に思った事を聞くのは大切な事です。これからも、些細な事でも疑問に思ったのなら遠慮なくお聞きください。そのための教師ですから」

二次創作の小説で、基本であるコモンマジックをやっつてすぐに系統の確認をして、すぐに系統魔法の修行へと移っているから勘違いしていたが、コモンマジックというのは魔法の基礎なのだ。料理でも格闘技でも日頃の基礎修業が大事なことから、魔法も基礎が大事なのは当然だ。

今の内に勘違いが正せて良かった。このまま聞いてなければ、自

分で調べて突き進んでいたかもしれないからな。

「ところで、何でも聞いていいって言いましたよね」

「はい。何かご質問がありましたか？」

「ええと、ミス・クララはどうしてまだどくし「ヴァル様？」

……ナンデモアリマセン」

とりあえず、クララさんの前で結婚だの恋人だのといった話は絶対にしないと誓った授業初日だった。

## 衝撃的な第二話

あれから三年の月日が経過し、俺は無事八歳の誕生日を迎えました。

え、飛び過ぎ？ 大丈夫、大丈夫。世の中には十年や二十年平気で飛ばすような物語もあるんだから、三年くらい全然問題ないともあれ、あれから俺は無事基礎も卒業 かなり早い部類らしい し、土と水のラインメイジとなっています。一番得意なのは植物を成長させる魔法です。

いや、ちゃんと理由があるんだよ？ 普通のオリ主みたいにマンガ技やらネタ技をやっていないのは、ひとえに風石問題のためなんだから。

まあ、その辺は完成した時に説明するとして、この植物の魔法、結構使い勝手が良かったりします。品種改良した薔薇で絞め殺したり出血多量で殺したり、毒性を持たせて毒殺も出来るようになりました。

ただし、この魔法は栄養が十分な土や、敵に埋めたりして使わないと不足分を精神力から持っていられるため要注意だ。下手したら何も無い場所で干乾びたミイラになる。

ちなみに、こうして魔法の研究に時間を割きまくっているが、原作キャラとは未だに接触していない。

本当に何やってるんだと言われそうだが、俺みたいなただのボンボンがヴァリエールだのツエルプスターだのオルレアンだのモードだのに関わってなどいられない。というか、そんな死亡フラグを好き好んで建てに行くなど、正気の沙汰ではないでしょう。

俺はまだ死にたくありません。

それに、風の噂によれば、あちらこちらにちらほらと他の転生者

らしき話が聞こえてきます。主人公達に近付いて許婚フラグやら死亡フラグやらを建てるのは彼らに任せるとして、俺は風石問題ですよ。堅実に生きなければ嫁を貰っても死にますからね。

「ですから、私は絶対に行きません。ええ、行きませんとも」

「何がですから、だ。分かるように話せ。話した所で今年ばかりは絶対に連れて行くがな。そもそも、本来公爵家からの誘いを断れるような立場に無いのを理解しろ。そして、去年も一昨年も『どこかへ姿を晦まして行方知れずです』などと言わなければならなかった私の立場も考えろ」

実の所、長々と脳内で説明を行ったのは、現在目の前にいる父しやうがいのせいでもあります。

ええ、うちは一応伯爵家ですからね。落ちぶれていたとしても公爵家から声が掛かる事も稀にあるというか、この腐れ親父が何故かあのヴァリエール公爵と交友を持っていたりするせいで毎年呼ばれるというか、つまりは毎年三度は死亡フラグ乱立の危機がやってくるのです。

エレオノール様の誕生日とか、カトレア様の誕生日とか、桃色核弾頭の完成記念日とか。

特に最後が危険極まりないです。誰が好き好んで原作ヒロインに近付きますか。というか、あの家の誰かとまかり間違っただけ好き合えば、イコールで公爵の魔法練習の的ですよ。プラスカリーヌ様の扱きです。

過労と負傷と鬱で死ねます。

「というか、父上の立場など知りません。父上一人が笑われて安全が確保できるならそれでいいじゃないですか。私が行けばうつかりどこぞの馬鹿貴族に目を付けられたりとかも十分ありえます。部屋から出なければ不幸などそうそう遭わないのですから、私は一生

屋敷の中で過ごしますよ。無理なら逃げます」

「はあ。どうしてこんな子供に育ったんだか。仕方が無い。最後の手段だ」

「？ 父上では捕まえられないのは去年証明したでしょう。無駄な「あら、私はまだよ？」事は……ええと、母上？」

「はい。お母さんですよ」

「私もいますよ、ヴァル様」

母上は水のスクエア、ミス・クララは土のスクエアです。

ダッ！ ガシッ！ ニコリ（汗） ニコッ

くお仕置き中です。しばらくお待ちください

「……………どなどどーなーどーなーこうしおのーせーてー」

ラインがスクエア二人に勝つなど不可能なんですよ。ありえません。しくしく。

ええ、現在ヴァリエール公爵家のお誕生日会を行っているパーティ会場です。しかも最悪な事に核弾頭のお誕生日ですよ。ほら、あちらこちらに話題の天才様がゴロゴロしてます。フラグ立てる気満々ですね。

がんばれ〜。

「それにしても、『迅雷』に『疾風』、『剛槍』や『白陽』と凄まじい人材ばかりだな。さすがはヴァリエール公爵という事か」

「……………そうじゃないですけどね」

父が感心したように眩くので、ボソツとため息とともに俺も眩く。この場合はさすが虚無、さすが原作ヒロインと言うべきだ。良かったな核弾頭。綺麗どころから選びたい放題じゃないか。

そう思いつつ呟いたのだが、風の高ランクメイジと思しき連中、特に転生者と目される奴らがピクツと分かりやすく反応を示してくれた。そして、示し合わせたかのようにこちらへとやって来る。

来たのは父曰く『疾風』『嵐轟』『千刃』の三人。おそらく、各グループの斥候だろう。

「お久しぶりです。ウングリユック伯爵」

「ああ。ギル君も壮健なようで何より。君達の噂は良く耳にしているよ」

「お恥ずかしい限りですね。ところで、こちらが幾度かお聞きしたご子息ですか？」

「初めまして。ヴァルトリーベ・レルヒエ・シュペルリング・ド・ウングリユックです。未だラインという凡才の身だったのですが、父に一度顔を出しておくように言われ、今回のパーティに参加させていただく事となりました。非才の身ですが、どうぞよろしくお願います」

「ああ。よろしく、ミスタ・ヴァルトリーベ」

疾風ギルとやらと握手して、一歩下がる。自己紹介の際に混ぜたラインという言葉に、転生者らしき中のほとんどが馬鹿にするような顔になり、そうでない者は俺が介入する意思を持たないと理解して頬を緩めた。

うん。是非とも頑張つて危険に身を投じて欲しい。こっちは地味に楽しく怠惰に過ごさせてもらいますので。

そうやって早々に色々なフラグの争奪戦から抜け出した俺が、心の中でニヤニヤと笑いつつ他の転生者が牽制しあっている様を眺めていると、ようやく今夜の主役達が登場した。

「……………え？」

それを見て、最初に来たのは驚愕。そしてそれは呆然へと変わり、恐怖へ変わるのにそう時間は要さなかった。

俺の視線の先にいたのは一人の女性。ピンク色の髪を腰まで伸ばし、軽くウェーブさせ、ニコニコと、そう、ニコニコと柔らかく、優しくそうな雰囲気であっている少女だ。

他の者達には、あの少女は見た目通り、可憐と言うべき妖精のような少女に、転生者には性欲や征服欲を満たしてくれる、母性全開な慈母に見えているだろう。

だが、俺は恐怖した。

その少女と仲良く歩く同い年の桃色の少女も、その母親も、姉も、父親も視界の外で、その少女だけが俺の視界全てを占有しているかのような思いになる。

否、俺は吞まれていたのだ。

ザリッ。

知らず、一步後退り、我に返ったがもう遅い。彼女に吞まれたという事実は消えないし、恐怖は意識がはっきりしてからの方がより一層精神を蝕んできた。

ケーキに群れる蟻のように、最後に現れた主役に一家へと群がる他の参加者を見て、なぜあれに気付かないのかと思う。

俺が初見で気付くほど、彼女　カトレア嬢のそれは分かり易いというのに。

そして、気が付けば声が漏れていた。

「……………そもそも、カトレア嬢は何故あれで生きていられるんだ？」

風の鬼が、それを聞き付けているとも知らずに。

### 開き直る第三話

一体全体、何がどうなっただんたろうね。

「では、話してもらいましょうか」

場所はヴァリエール公爵家の一室で、広々とした部屋にいるのはたったの三人。一人は当然俺で、もう一人はヴァリエール公爵その人だ。まあ、ここまではいい。いや、良くないが、その隣で今の発言をした御仁に比べればどうという事も無い。

というか、何故俺は公爵夫人に睨まれているんだ。

「申し訳ありません。話せと申されましたも、一体何を話せば良いのかが分かりません。心当たりが無いのですが、私が何か致しましたでしょうか？」

正直に言えば、公爵令嬢を核弾頭呼ばわりとか心当たりが無くも無いが、心の中でも覗かない限りは突っ込まれる事じゃない。だから本人に聞いたのだが、当人は眉間に深い皺を寄せて目元をさらにキツくする。

そんな命の危険を感じさせる顔で何かを言おうとしたが、それよりも先に公爵が口を開いた。

「妻のカーリヌが、君が私の娘であるカトレアを見て、何故生きているのか、という風な言葉を口にしたと言っているのだよ。それは、本当かね？」

公爵は夫人と違い、こちらが子供だという意識があるのだろう。優しく、諭すような声音で問いを投げかけてきた。だが、その内容

は割と洒落になっていない。というか、ボソツと呟くレベルだったというのに、あの騒がしい中で聞き取るというのは一体どういう耳をしているのか。

一瞬浮かんだ地獄耳という単語を心の中に封印して、俺はため息を吐く。聞かれている以上、誤魔化すなど不可能だろう。

心を切り替えて、背筋を伸ばす。

「……………初めに言っておきますが、私にカトレア様を治す事はできません。その前提を持って、私の話をお聞きください」

「う、うむ」

いきなり雰囲気が変わった事に戸惑っている様子で頷くが、わざわざ落ち着くのを待つ義理も無い。とっとと畳み掛けて、命の危機を脱させてもらう。

「そもそも、私が今回始めて公爵様含むヴァリエール公爵家のご家族とお会いしました。もちろん、カトレア様が病弱という事も聞き及んでおります。ですが、私がカトレア様を直に見た限り、病弱、というのは誤りであると断言させていただきます」

「ですが、カトレアは確かに病弱の身です。水の秘薬を使ってもすぐにまた病に伏す。そんなカトレアを病弱と呼ばないのならば、この世に病弱という言葉は必要ありません」

「お言葉ですが、カトレア様がよく病に掛かるのは、肉体の病に対する抵抗が弱いからではありません。そうではなく、全く別の要因によって、常に体がボロボロなのです」

カリー又夫人が異を唱えるが、“あれ”を見た限り、病弱であるというのは結果だ。

「証拠も何も提示できませんが、カトレア様が病弱なのは肉体で

はなく精神　　魂こそが根本的な原因です。少なくとも、病を場当たりに治していくだけでは、今後もその状況は改善されないでしょう」

「魂が原因というと、カトレアの精神が弱いとでも言うのかね？」

「いえ、違います。むしろ逆です。カトレア様は類に見ない程に強く大きな魂をお持ちになっています。それこそ、私如きではその全てを図る事も出来ないほどに強靱な魂です」

「？　強靱ならば何の問題も無いのではないですか？　強いという事は良い事だと思いますが」

カリー又夫人が疑問の声を上げる。だが、その考えは間違いだ。

「東方には過ぎたるは及ばざるが如し、という諺があります。例えば、一定量なら薬になる物も、過剰に摂取すれば毒となります。

それと同じく、カトレア様の場合は、魂が強く、そして大き過ぎて受け止めるべき肉体が今にも壊れそうになっているんです。それこそ、ガラスの皿に、鉄の塊を載せていくような物です。小さな塊なら平気でも、大きな物ではそつと載せても壊れてしまいます」

「つまり、カトレアの魂が、肉体を壊している？」

公爵の言に頷く。

実際にあれが魂かどうかは分からないが、他の人間には見えない物が内側から溢れ出していたのだ。直感的に溢れた魂だと思ったが、そうでなくても、あれが害になってるのは間違いない。

美人薄命だの天才は短命だのという話がある。動物を従えるのは古来より強い魂の持ち主と相場は決まっているが、あの強い魂が、ろくに魔法も使えないカトレアを遠距離から錬金を使えるような力を与え、同時に体を蝕んでいるというのは想像に難くない。

「正直、聞いていた限りではただ我々が知らない未知の病に掛か

っているのでは、と思っていました。それならば、アピールの方法次第で治る可能性もあるのでは、と。ですが、実際に見て、私は思わず膝を着き頭を垂れそうになりました。他の人々は気付きもしませんでした。私から見て、カトレア様はそれほどに畏怖すべき存在です。神が降りたか、と思うほどの衝撃でしたから」

「大げさだな。そんな事を言っていると異端審問に掛けられるぞ」  
「普段はこんなに饒舌じゃありません。サイレントが掛かっていなければ、この場でも適当に誤魔化していたでしょう。時と場所を弁えて話すくらいはします。目立つような真似はしませんよ」

「当たり前です。もし外でも話すようなら、私達はあなたを始末しなければならなくなります。これからも、きちんと分を弁えて行動するように。……話を戻しますが、カトレアが良くなる方法は本当に無いのですか？」

カリー又夫人が頷き、話を戻して問うて来たが、これに関しては首を横に振る以外にない。助けられるならば助けたい所だが、はっきり言ってカトレアの状態は未知の塊だ。そう簡単に手は出せない。

「申し訳ありませんが、カトレア様のお体に関しましては、私にできる事は無いと言わざるを得ません。魂というのも私の直感による所が大きいですし、何より、私自身が魔法に精通している訳でもなければ、人体の神秘にも無学な未熟者です。知るべき事を知らないままに何かを成せるような天才でもありませんから」

そもそも、風石問題に掛かりきりな俺としては、これ以上無理難題を抱え込みたくないのだ。

人間一人の肉体を大き過ぎる魂らしき物に耐えられるように強化しろ？

無茶振り過ぎる。人工的に仙人でも作れと言うのか。実在したとしてもなるのに云十年掛かるのが普通だし、仙人ってというのは肉体

と魂を少しづつ消化させて、世俗から抜け出した者の総称だ。仙人にして解決としても、その前に死ぬだろう。

公爵夫妻もさすがにそこまで期待していた訳でもないのか、それから二、三問答を交わした後に解放してくれた。できれば初めから関わらないのがベストだったが、縁は薄そうだし大丈夫だろう。

八歳のガキを尋問するというのは、実際藁にも縋りたい気分だったんだろうな。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n4408x/>

---

ゼロの使い魔 ~大樹の魔法使い~

2011年12月8日23時00分発行